

第3章 ビハーラの現状 — 調査報告 —

1 教区ビハーラ活動者の現状

各教区に対するビハーラ活動に関する調査

この調査は、全国の32教区（特区含）に対して、2018（平成30）年3月に宗派社会部よりアンケートを依頼しメールにて回答書を提出いただき調査を行った。

この結果は、各教区のビハーラ代表者や教区担当者の回答に基づくものである。そのため、教区において、ビハーラ活動をどのように捉えているのかが伺える資料となる。

また、本調査は、教区ビハーラだけではなく、教区内のビハーラ団体からの回答もあり、それらを含めて教区ごとに集計した結果を示している。そのため、多少統計データが重複した集計となった可能性がある。

また、問10に関しては、各教区ビハーラの事業報告書も参考にして、集計を行った。

尚、レポートの中の（n= 数字）はその項目の有効回答数である。また、中央値や標準偏差、欠損値などの専門用語については、巻末の専門用語解説一覧を参照いただきたい。

問1. 教区内組織形態について教えてください（該当に○）

表1 教区内組織形態

「御同朋の社会をめざす運動」 （実践運動）に含まれる	社会福祉推進協議 会に含まれる	教区の所属団体	独自の活動	その他
34.4%	15.6%	90.6%	9.4%	0.0%

※数値は全体中の割合（%）

➡大半が、「教区の所属団体」と回答したが、教区の所属団体ではなく「独自の活動」との回答もあった。「独自の活動」と答えた組織の中には、活動人数が多く、活動が活発に行われていることが推測されるものもあった。

問2. 会員数について教えてください

表2 教区ごとの会員数

No.	教区	男性	女性	合計	No.	教区	男性	女性	合計
1	北海道	27	28	55	17	和歌山	12	29	41
2	東北	10	8	18	18	兵庫	25	25	50
3	東京	204	93	297	19	山陰	83	131	214
4	長野	121	31	152	20	四州	12	12	24
5	国府	61	40	101	21	備後	19	354	373
6	新潟	11	10	21	22	安芸	23	31	54
7	富山	37	38	75	23	山口	39	80	119
8	高岡	15	25	40	24	北豊	21	26	47
9	石川	8	42	50	25	福岡	15	44	59
10	福井	20	9	29	26	大分	64	25	89
11	岐阜	14	41	55	27	佐賀	25	60	85
12	東海	7	20	27	28	長崎	23	2	25
13	滋賀	5	8	13	29	熊本	25	36	61
14	京都	35	90	125	30	宮崎	6	5	11
15	奈良	27	77	104	31	鹿児島	38	56	94
16	大阪	30	39	69	32	沖縄	1	2	3
合計							1,063	1,517	2,580

➡各教区からの報告によって表にまとめたが、会員についての定義が異なるため、この結果が全てを示しているわけではない。実際に活動している人、会費を支払っている人、広報を受け取っている人や団体で入会しているなど、定義については様々である。

表3 会員数の統計

	男性	女性	合計
平均	33.2人	47.4人	80.6人
中央値	23人	31人	55人
最小値	1人	2人	3人
最大値	204人	354人	373人

➡表3では、会員数の統計を示したが、平均値については、活動者数の多い教区が著しくその数値を押しあげているため、平均値が実態を示しにくくなっている。そのため、中央値の方が、より平均的な教区の会員数を示していることとなっている。

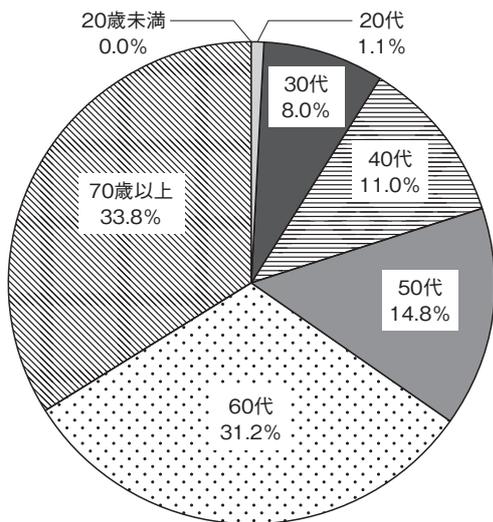


図1 男性のビハーラ会員の年代

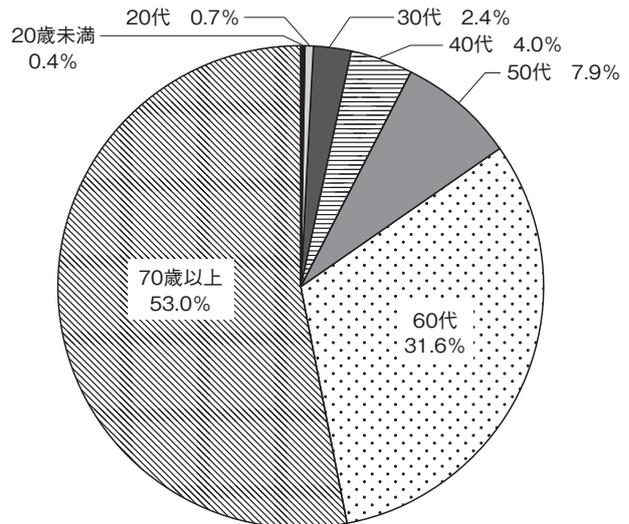


図2 女性のビハーラ会員の年代

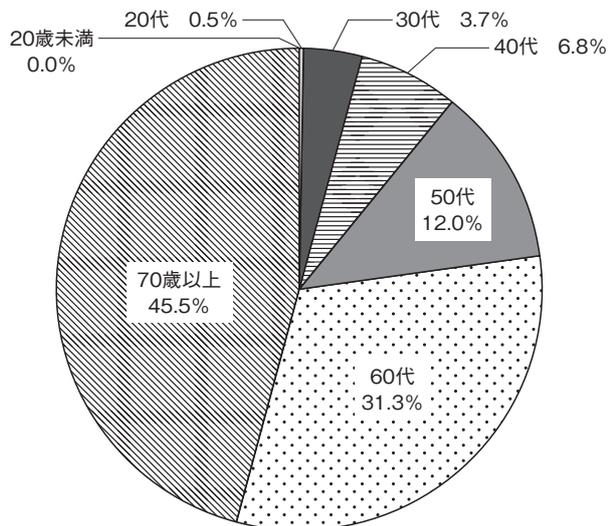


図3 全体のビハーラ会員の年代

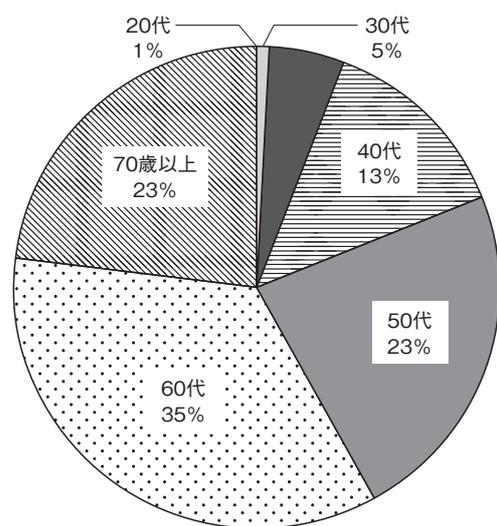


図4 10年前の教区ビハーラの年代別活動者
(ビハーラ活動20年総括書より引用)

※図1、2の数値はビハーラ会員の性別ごとの年代の割合 (%)

※小数第二位で切り捨て

➡60代以上の会員が全体の58%であった約10年前のデータ（図4参照、20カ年総括書より引用）と比較すると、現在、60代以上の会員が全体の75%以上となっており、高齢化が顕著である。さらには、40・50代の割合も低下しており、若手会員の増加が重要な課題である。

問3. 会員の区分について教えてください（該当する区分に人数を記入）

僧侶・寺族・門信徒・その他 ※但し、寺族のうち僧籍のある方は、僧侶に記入してください

表4 僧侶・寺族・門信徒等の会員数

	僧侶	寺族	門信徒	その他
平均	34.4人	4.8人	36.4人	4.5人
中央値	25人	2.5人	20人	0人
最小値	2人	0人	0人	0人
最大値	165人	27人	320人	98人

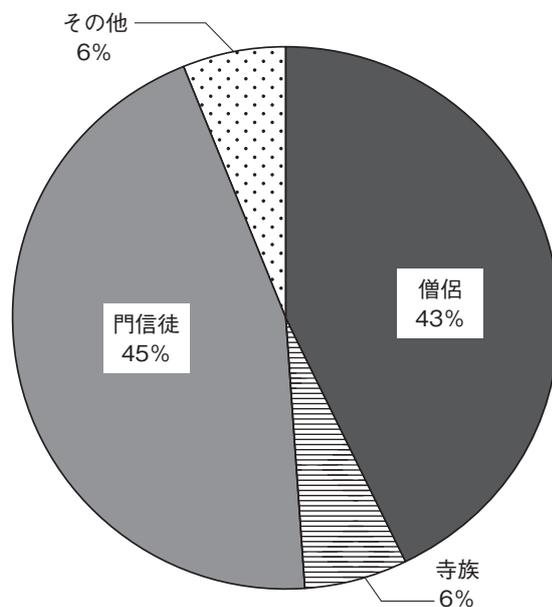


図5 僧侶・寺族・門信徒等の会員数の割合

➡図5からビハーラ活動は僧侶と門信徒が支える活動であることがわかる。

問4. コーディネーター的役割者の有無について教えてください（有か無に○）

有とお答えの場合は、人数及び、その役割は誰が担っているのか教えてください。

（コーディネーター・教区ビハーラ代表・教区事務担当・その他役職者）

➡コーディネーター的役割者が所在している教区が40.6%（13教区）であった。これは、20年総括書と比較すると、5教区減少しており、コーディネーターとしての活動の停滞が推測される。

また、コーディネーター的役割者の担い手は、コーディネーター4人、教区ビハーラ代表6人、教区事務担当2人、その他役職者6人（複数回答あり）であった。

問5. 教区ビハーラに在籍するビハーラ活動者養成研修会修了者の人数について教えてください

➡各教区の平均は20.9人で、中央値20人、最小値4人、最大値54人であった。

問6. ビハーラ会員における門徒推進員の有無について教えてください。

有とお答えの場合は、人数を教えてください

➡教区ビハーラに門徒推進員が所属している割合は、71.9%であり、平均すると8.8人で、中央値5人、最小値1人、最大値38人であった。

また、門徒推進員の所属が30人を超える長野、山陰、山口教区と約20人の備後教区、それ以外は10人以下の教区となっていた。多くの門徒推進員が所属している教区とそうではない教区があり、それぞれ活動の進め方が異なることがうかがえる。

問7. 活動されている場所（自然災害にかかる活動も含む）・施設並びに内容について教えてください。

教区内のすべてのビハーラ関連団体（組単位や地域での活動団体等、教区で把握されているすべての団体）を調査対象としてください。

※活動者数は団体の会員・ボランティアに関わらず、活動に携わっておられるすべての方をカウントしてください。また、複数の団体で活動される方も延べ人数にてご報告ください

【団体名】 _____

[活動場所(施設名等)] _____

[活動者数] _____ 人 [活動年数] _____ 年

[活動頻度] 年・月・週 _____ 回

※年・月・週のいずれかに○印をつけてください

[活動者] 僧侶・寺族・門信徒（門徒推進員・仏教婦人会・仏教壮年会）
・その他（ _____ ）

※複数回答可

[活動内容] ※以下、行っていることすべてに○印をつけてください。

1. 仏教儀礼や法話
2. 仏教や死生観についての対話
3. カウンセリング全般(傾聴など)
4. 身体的な介助
5. レクリエーション活動
6. ビハーラ活動に関する研修会への参加
7. 在宅ケア
8. 電話相談
9. その他(具体的に: _____)

※問7の回答様式

表5 各教区のビハーラ団体と活動場所の数（施設等）（n=201）

No.	教区	団体数	施設数	No.	教区	団体数	施設数
1	北海道	2	2	17	和歌山	1	1
2	東北	1	2	18	兵庫	2	3
3	東京	3	5	19	山陰	3	8
4	長野	3	3	20	四州	0	0
5	国府	4	4	21	備後	4	9
6	新潟	4	7	22	安芸	7	6
7	富山	1	25	23	山口	4	24
8	高岡	3	6	24	北豊	2	2
9	石川	3	4	25	福岡	1	8
10	福井	3	13	26	大分	5	5
11	岐阜	2	19	27	佐賀	2	9
12	東海	1	1	28	長崎	2	2
13	滋賀	2	5	29	熊本	1	6
14	京都	1	4	30	宮崎	1	3
15	奈良	1	8	31	鹿児島	1	4
16	大阪	1	2	32	沖縄	2	2

表6 活動場所における活動者数・活動年数（n=201）

	活動者数	活動年数
平均	9.8人	15.9年
標準偏差	20.8人	9.4年
中央値	5人	16年
最小値	1人	2年
最大値	204人	36年

表7 活動者数と施設数（n=201）

活動者数	施設数	活動者数	施設数
1人	39	8人	19
2人	18	9人	1
3人	14	10人	16
4人	27	11-20人	25
5人	15	21-30人	4
6人	6	31-40人	3
7人	8	41人以上	6

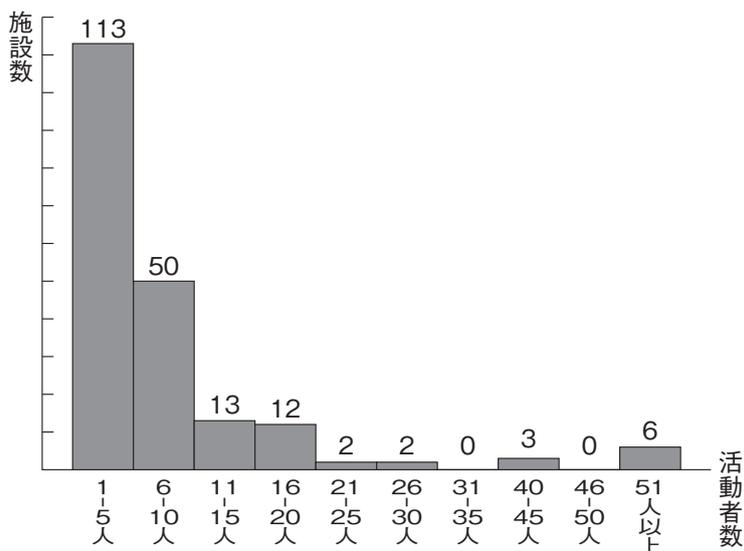


図6 活動者数の分類からみる施設数 (n=201)

➡表5・6・7及び図6より、各教区において活動しているビハーラ団体は73団体あり全国の約200箇所の施設で活動が行われていることがわかった。これは宗門のビハーラ活動が全国で展開していることを如実に示しているといえる。

一方で、施設での活動者数は、1人で活動しているとの回答が最も多く、5人以下での活動が各施設における活動の約55%を占める結果となっている。つまり、ビハーラ活動は全国で極めて少人数で行う活動として展開されている。このことは全国の教区ビハーラが支えることによって成り立っている部分もあるだろう。裏を返せば、それぞれの活動を支えることが非常に重要であり、活動者それぞれにおけるつながりをサポートしたり、活動内容を確認め合うことなど、活動者をどのように支えるのが課題であるといえる。加えて、6人以上30人以下の中規模の活動と、40人以上の大規模な活動があることがうかがえる。それぞれの規模によって活動の進め方が違うと考えられ、これもまたその実態をより明らかにすることが課題である。

表8 活動場所における活動頻度 (n=196)

	活動頻度 (施設)
週2回以上	1
週1回	7
2週間に1回以上	19
月1回	109
2ヶ月に1回以上	6
年に2~5回	44
年1回	10

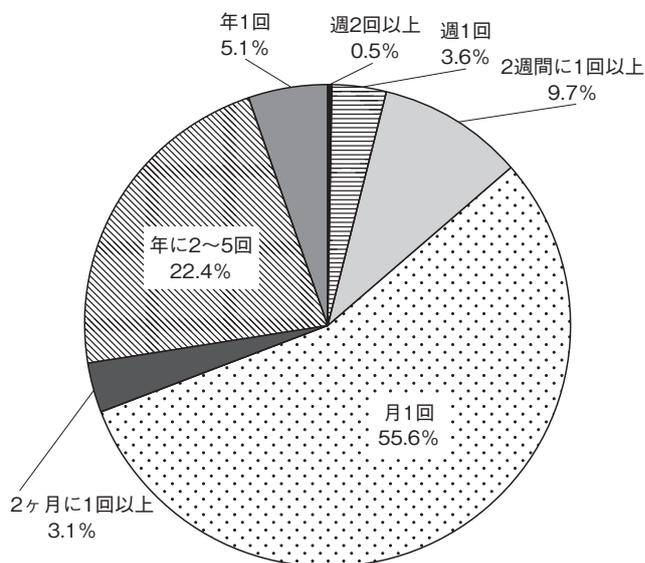


図7 活動場所における活動頻度 (n=196)

➡表8及び図7より、月1回の頻度で行われているビハーラ活動が最も多く、55.6%であり、全体の半数以上を占めていることがわかった。2週間に1回以上の頻度での活動が13.8%、月1回よりも少ない頻度での活動が30.6%であった。施設における活動頻度の多さ・少なさが、良い・悪いということにつながるのではないという前提で3つの実態に分けるならば、施設における活動頻度は、月2回以上の活動で頻度が多い群、月1回程度の群、2ヶ月に1回以下の頻度が少ない群と3つに分けられることがわかった。それぞれの施設状況や施設との付き合い方の歴史の中で、現状の活動形態になっているということであろう。

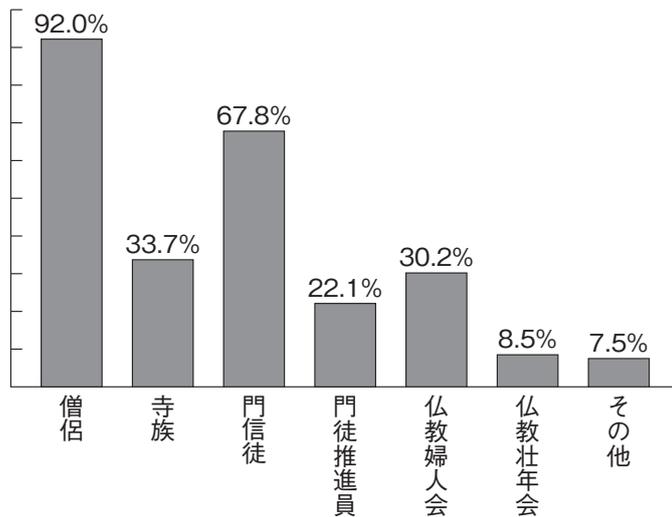


図8 活動場所における活動者の区分（一人以上いる割合）（n=199）

➡図8より、僧侶の活動者が92.0%と最も多く、次いで、門信徒が67.8%と多かった。しかし、門徒推進員や仏教婦人会などの割合も低くないため、積極的に活動を推進していると推察される。

表9 活動内容の回答割合（n=218）

	仏教儀礼や法話	仏教や死生観についての対話	カウンセリング全般（傾聴など）	身体的な介助	活動レクリエーション	ビハーラ活動に関する研修会への参加	在宅ケア	電話相談	その他	施設数
高齢者施設	87.0%	24.7%	42.0%	19.8%	70.4%	22.8%	1.9%	1.9%	25.9%	162
寺院	68.8%	43.8%	75.0%	18.8%	31.3%	50.0%	12.5%	25.0%	68.8%	16
病院	75.0%	29.2%	45.8%	20.8%	58.3%	25.0%	8.3%	4.2%	12.5%	24
福祉関係	87.5%	37.5%	37.5%	12.5%	37.5%	12.5%	0.0%	0.0%	62.5%	8
その他	37.5%	12.5%	12.5%	12.5%	37.5%	25.0%	0.0%	0.0%	75.0%	8
全体	82.6%	26.6%	43.6%	19.3%	63.8%	24.8%	3.2%	3.7%	30.7%	218

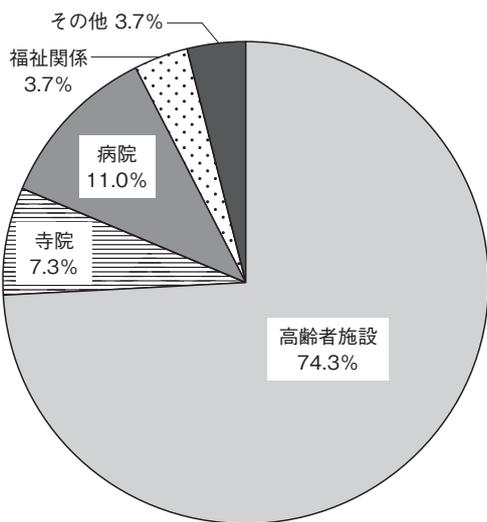


図9 活動場所の割合 (n=218)

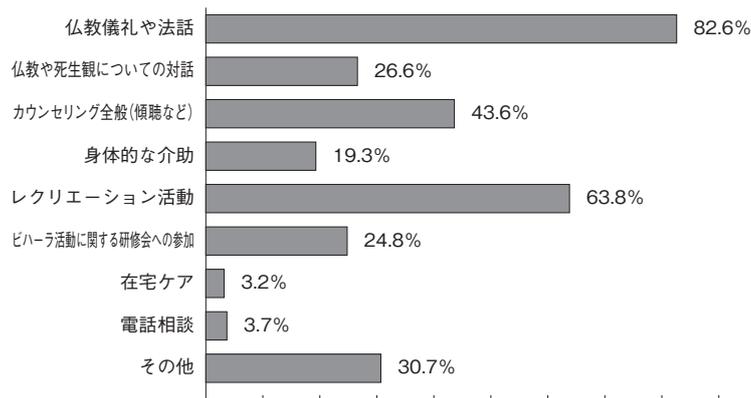


図10 ビハーラ活動者の実践内容 (n=218)

➡表9、図9より、高齢者施設における活動が約4分の3の割合を占めていた。これが宗門のビハーラ活動の特徴であるといえる。

また、図10から実践内容は「仏教儀礼や法話」「レクリエーション活動」「カウンセリング全般(傾聴など)」が高い割合で実践されていた。特にその傾向は高齢者施設や病院においても顕著であった。

寺院で行うビハーラ活動の特徴としては「カウンセリング全般」が最も高い割合であった。これは寺院で、広く悩みを聞く活動をビハーラと位置付けているようである。

また、ここでの「その他」は、福祉施設と病院など複合している場所での活動や、災害支援や乳児院訪問などの回答もあった。

問8. 教区内のビハーラ関連団体での超宗教・超宗派やNPO団体との交流について教えてください。

表10 教区内のビハーラ関連団体での超宗教・超宗派やNPO団体との交流団体数

教区	団体数
東京	3
長野	5
四洲	2
北豊	3
福岡	1
合計	14

開催頻度 月1回、年4回、年2回、年1回など

内容 研究会、講演活動による啓発活動、傾聴ボランティアや法話会、チャリティ活動や交流活動など

➡ビハーラを提唱した田宮仁氏は元々、超宗派での活動を目指しており、本願寺派のビハーラ活動においても、いくつかの教区においてはそのように取り組まれている部分もあった。

問9. 教区ビハーラ内の活動の情報発信・情報共有について教えてください

1. 会報誌 (有 /年回・無)
2. オリジナルリーフレット (有・無)
3. ホームページ (有・無)
4. ハガキによる連絡 (有・無)
5. メールによる連絡 (有・無)
6. SNSによる発信 (Twitter・facebookなど) (有・無)
7. SNSによる共有 (LINEなど) (有・無)
8. その他 ()

表11 教区ビハーラ内の活動の情報発信・情報共有について

会報誌	オリジナルリーフレット	ホームページ	連絡ハガキによる	連絡メールによる	発信SNSによる	共有SNSによる	その他
43.8%	25.0%	12.5%	50.0%	6.3%	3.1%	6.3%	18.8%

問10. 教区における研修会・協議会・講座等の開催状況について教えてください

表12 教区における研修会・協議会・講座等の開催回数 (年間)

No.	教区	回数	No.	教区	回数	No.	教区	回数
1	北海道	6	12	東海	2	23	山口	5
2	東北	0	13	滋賀	13	24	北豊	3.3
3	東京	95	14	京都	11	25	福岡	12
4	長野	18	15	奈良	8	26	大分	3
5	国府	2	16	大阪	17	27	佐賀	3
6	新潟	1.6	17	和歌山	7	28	長崎	2
7	富山	3	18	兵庫	3	29	熊本	11
8	高岡	2	19	山陰	4	30	宮崎	6
9	石川	8	20	四州	1	31	鹿児島	4
10	福井	1	21	備後	12	32	沖縄	0.1
11	岐阜	1	22	安芸	8			

※数年に一度や〇〇年のみ開催などの回答に関しては、1以下の数値として集計した

➡表11より、教区内の連絡については、ハガキや会報誌による情報発信・情報共有が約半数で最も多い手段であった。

表12から、教区において研修会・協議会・講座等を1年間に開催している回数の中央値は4回であり、図7の活動頻度に比べて回数が少ないことがわかった。物理的に集まるのが難しい教区もあるが、研修会等を活発に行うことが、ビハーラ活動そのものを支えることができると考えられるため、より回数を増やしたり、有効に集まる方法を考えることが重要である。

問11. その他特記すべき活動について教えてください（箇条書）

➡この結果は、大きく6つに分けることができた。

アンケート結果そのものは、「 」で示す。

1. [医療領域での活動]

(ア) ガン患者への支援 (イ) 患者家族へのケア

2. [幅広い年齢層への活動]

(ア) 高齢者施設での活動 (イ) 子どもたちへの活動

3. [災害支援活動]

(ア) 災害支援ボランティア

4. [研修会の開催]

(ア) 教区での研修会 (イ) 教区以外での研修会

5. [活動の推進]

(ア) 組の実践運動推進事業 (イ) 参加の促し

(ウ) 他団体との関わり (エ) 個々の会員の活動

6. [その他の活動]

(ア) 宗教行事とともに (イ) 当事者の語り合い

1. [医療領域での活動] として、「病気で悩みを抱えている当事者とその家族への傾聴活動」「小児がん患者・家族宿泊支援」といった当事者や家族への活動と共に、「ビハーラ建設（ケア施設）を目標にしている」などのビハーラ活動が実践できる施設の建設に向けて社会的な活動も含めて実践しているとの回答があった。
2. [幅広い年齢層への活動] として、高齢者施設の活動のみならず、「おもちゃサロン」や「仏の子の集い（キッズサンガ）」「子ども食堂の実施」など、子どもたちへの活動を行っていることがうかがえた。
3. [災害支援活動] として、継続10年を目標として東日本大震災の災害支援ボランティアを行っているとの教区があった。また、現地のボランティアセンターと協力しながら実践しているとの回答もあった。
4. [研修会の開催] は、教区としての研修会と、教区以外での研修会が実践されており、傾聴についての学びを深めたり、啓発活動を含めて活動していることが伺えた。
5. [活動の推進] としては、組内の全ての寺院での実践活動と位置付けている回答や、参加者を増加させることを目的とする広報や、他団体と協力するという回答があった。また、それぞれ個々の活動が自主的に実践していることを推奨している取り組みもあるようであった。
6. [その他の活動] として、花まつりや成道会などの実施や、当事者同士の語り合いの会を実施しているなどの回答もあった。

問12. 教区におけるビハーラ活動のこれからの課題について教えてください（箇条書）

➡この結果は、大きく6つに分けることができた。

1. [ビハーラ会員の広がり]
 - (ア) ビハーラ会員の高齢化 (イ) ビハーラ会員の減少
 - (ウ) ビハーラ会員の固定化 (エ) 次世代の育成
2. [学習会や研修会の難しさ]
 - (ア) 学習会や研修会への参加の乏しさ
 - (イ) ビハーラ活動者養成研修会の受講生がない
3. [ビハーラ活動そのものの再検討]
 - (ア) 教義理解の異なり (イ) 活動の再検討
4. [活動場所の展開]
 - (ア) 緩和ケア病院や高齢者施設の活動 (イ) 地域に関わる活動への転換
5. [会員の中での情報共有]
6. [施設職員との連携]

1. [ビハーラ会員の広がり] については、ビハーラ「会員の高齢化」との回答が見られ、結果として、「会員数の減少」も起こっているとのことであった。同様に、「ビハーラ活動者の固定化」という回答もあり、特定の活動者に留まっているという状態も見受けられた。その結果として、「次世代の育成」が課題となっており、「養成研修会修了者は多くいるが、その後、各地域でのビハーラ活動につながっていない」などの回答も見受けられた。
2. [学習会や研修会の難しさ] については、「教区主催の講座及び研修会への参加が乏しい」といった教区内での活動の難しさについての回答や、「ビハーラ活動者養成研修会に参加する人材探し」といった宗派の研修会への参加者を見つけるのが難しいという2つの課題があった。
3. [ビハーラ活動そのものの再検討] については、「浄土真宗の教えに基づくビハーラ・ケアの理念を構築することが課題であるが、教義理解に各々違いがあるため、まとまらない」といった、教義とビハーラ実践の整合性についての課題がある。また、「活動のモデルが現在の施設状況にあっているのかの検討が必要」などの活動モデルとしての検討が必要ではないかという回答もあった。
4. [活動場所の展開] については、「緩和ケア病院での活動」といった医療領域における活動を模索したいという回答と、「臨床や高齢者以外の地域に関わる活動への転換」という新しい活動を求める回答があった。
5. [会員の中での情報共有] については、「近隣教区との親密な連携（情報共有）が不足している」「教区との連携を深め、寺院から組、組から教区単位での福祉活動・ビハーラ活動に参画できるネットワーク作り」といった、より緊密な連携を求める回答があった。
6. [施設職員との連携] については、「施設及び医療関係者との連携」という回答があり、活動者が施設側との連携を求めているものの、どのように関係を築いていくのが課題

であることが見受けられた。

ビハーラ活動の活性化のためには、その活動の展望を見通せることが重要であろう。しかしながら、仏教を基礎としたターミナルケアから始まったビハーラではあるが、その領域が広がるにつれて、その見通しや評価が不透明になっているという問題がある。宗門のビハーラ活動が浄土真宗を背景としていることは明らかであるが、そのうえで、緩和ケア、高齢者施設、その他それぞれの領域において、どのようなことが目的であり、どのような課題があり、どのように評価するのかを探索的に始めることが急務である。それなくして、活動者の減少に見られるような、それぞれの現場の閉塞感を打破することが難しい局面であることがうかがえる。

問13. ご意見・ご要望等があれば、ご記入ください

➡この結果は、大きく5つに分けることができた。

1. [ビハーラ活動の専門性と一般性]
 2. [実践促進のための資料作り]
 3. [研修会修了生が活躍するための支援]
 4. [講師の派遣]
 5. [総括書の冊子化]
-
1. [ビハーラ活動の専門性と一般性] については、「ビハーラのイメージが、誰もがができるビハーラ活動から、専門的な知識や資格が必要なビハーラ活動になっているのではないかと感じている。今一度、30年を機縁として、発会当初の願いを確認してほしい」などの意見があった。発会当初からある、全員での活動であるという一般性と、ビハーラ僧養成などの専門性の流れについての整合性についてより明確にする必要があると考えられる。
 2. [実践促進のための資料作り] については、「実践運動との連携や教化団体との関係についてモデルケースを示してほしい」「活動したいけれど一歩が踏み出せない人をどう誘えば良いかと悩む事もあります、そのような人が読んでくださり、ビハーラ活動を始めるきっかけとなるような本を作っていただきたいです」、などの要望があった。新たにビハーラ活動に取り組む方に対して、より具体的な方策の資料や入門のための資料が必要であると考ええる。
 3. [研修会修了生が活躍するための支援] については、「ビハーラ活動者養成研修会修了者の方々が、率先して活躍いただけるように、各教区で対応を検討していきたい」と教区の意気込みが述べられたものがあったが、これは問12に見られたような、活動者活性化のための取り組みであり、宗門全体として考えていかなければいけない課題であると考ええる。
 4. [講師の派遣] については、「ビハーラ講師派遣制度を実施していただきたい」とあるように、研修会実施に際して宗派から講師派遣をしてほしいとの要望があった。
 5. [総括書の冊子化] という要望もあり、この総括書は、ホームページでの開示とともに冊子として発刊することとなった。